知識の花弁

三田メディアセンターだより

No.14
2019春

センセイ×本

貴重書紹介
月岡芳年『月百姿』

三田メディアセンター 美術品めぐり

スタッフレポート
図書館と猫の深い関係

図書館の舞台ウラ
新着図書 デビューへの道

お知らせ

慶應義塾大学 三田メディアセンター

recommend 1

赤木 完爾 先生
（名誉教授・前メディアセンター所長）

『非情の海』
N・モンサラット著、吉田健一訳／フジ出版社

もはや記憶が定かでないが、十代の頃から戦争の記録文学を好んで読んでいた。『非情の海』もその一冊である。半世紀経って、政策と戦略、政軍関係の視角から、20世紀の戦争と平和を考えるのが私の職業である。仕事に関係しない読書には禁欲的であることが当世風かもしれないが、この種の書物に耽溺してしまう性癖は直らない。

第二次世界大戦の連合国にとって、戦争の帰趨を決定したのは、北米の莫大な生産力であり、戦用物資を戦場に運ぶことであった。それを阻止しようとするドイツ潜水艦の跳梁を、英米海軍はレーダーなど新兵器の開発、暗号解読、果ては統計学まで動員して最後は打倒する。それは教科書に書かれる戦史である。

一方、『非情の海』は、英海軍の護衛艦が潜水艦と戦いつつ、荒れ狂う冬の大西洋やバレンツ海を渡って、いかにしても輸送船団を目的地に届けることを至上の任務とする戦場が舞台である。そこでは一度きりの蛮勇など役には立たない、玉砕など無縁の戦場である。商船出身の艦長をはじめ乗組員は、凄惨で悲壮な事態に遭遇しても、平常心で粘り強く誠実に戦争を生きている。この68ヵ月にわたる海上護衛戦の物語は、私の戦争観を変えた。

原書は1951年刊行、訳者は吉田健一、初版は『怒りの海』と題され新潮社（1953）、次いで『非情の海』と改題されフジ出版社（1967）、後に至誠堂（1992）から出版されている。

センセイ×本

recommend 2

田邉 勝巳 先生
（商学部教授）

『ゴーゴー・アジア』
蔵前仁一／凱風社

私が学部生だった時、日吉メディアセンターの常勤嘱託のアルバイトをしていました。受付に座っていると、面白そうな本が次々に返却されます。当時、大学生にありがちな「自分は何者か、何をするべきか」、悶々と悩んでいた自分は、ヒントを求めて哲学書から物理書など様々な種類の本を乱読していました。その中で、結果的に、自分の人生を変えてしまった本が、本塾出身の蔵前仁一さんが書いた旅行記「ゴーゴー・アジア」でした。当時はインターネットが普及する前で、海外の情報はTVか本でしか得られません。「ゴーゴー・アジア」──タイトルだけだったら絶対に自分では読んでいなかった本──には著者の1年以上にも及ぶ貧乏旅行、クレイジーなトラブル、教科書に書かれていないアジア諸国の社会・風俗・文化が旅人目線で生き生きと描かれています。軽い気持ちで読み始めたものの、動悸が止まらず、夜通し布団の中で一気に読み切ったことを覚えています。こんなパラレルワールドが自分の暮らす世界に存在し、そこに行くことができるのかと。国内旅行ですら、コスパが悪いと極端な帰宅部だった私が、卒業旅行で、初めての海外旅行にインドを選び、病気になったり、騙されたり、酷い経験をします。卒業後、普通に民間企業に就職しましたが、すっかり人生観が変わってしまった私は、やりたいことをやって後悔しようと2年で会社を辞め、大学院で研究しつつ、隙を見ては海外に出かけ、現在に至ります。

recommend 3

川島 建太郎 先生
（文学部教授）

『時空のゲヴァルト』
マンフレート・シュナイダー／三元社

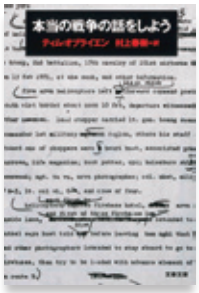
マンフレート・シュナイダーの『時空のゲヴァルト：宗教改革からプロスポーツまでをメディアから読む』を紹介したい。シュナイダーの存在は日本では残念ながらほとんど知られていないが、彼の代表的な論文を集めた本書は隠れた名著である。副題や目次をみれば分かるとおり、実に多彩なテーマが――マスメディアという語義に限定されない、広い意味での――〈メディア〉という観点から論じられている。哲学、宗教、文学、音楽、映画、裁判、政治、人口統計、スポーツなど、今日の大学なら学部や専攻に分かれて別々に論じられるはずのテーマが、メディアという観点からみれば統一的に捉えうるのである。なぜか。それは思想、信仰、芸術、法、政治、経済ともに例外なくメディアを必要とし、メディアがなければ機能しえないことで共通しているからである。言いかえればメディアはあらゆる精神活動、経済活動、政治活動の基礎であり前提条件である。

例えばルターの宗教革命は、この視座からみれば、メディア政治にほかならない。カトリック教会がそれまで神とのコミュニケーション回路を独占していたのに対して、ルターは聖書主義によって、神と通じる回路を新たに独自に確保した。しかしその聖書主義も、聖書をドイツ語へと翻訳し、グーテンベルクの発明によって各家庭へと普及させる印刷術というメディア革命が前提となっている。宗教のように、目に見えず形なきものを対象にする営為であっても、あるいはそのような営為だからこそ、メディアの事物性に深く根ざすほかないのである。

三田キャンパスにようこそ！ 先生方が思い出の本や塾生にすすめたい本を紹介します。
ジャンルも年代も制限なしの異種読書格闘技。いざ！

recommend 4

中嶋 亮 先生
（経済学部教授）



『本当の戦争の話をしよう』
ティム・オブライエン著、村上春樹訳／文藝春秋

昼寝ばかりの大学生活を送って来ました。そんな自分だって、言いたいことはあります。私の講義中によく見る若者達の机を抱えた窮屈なシエスタは邪道に違いない。それはもっと伸び伸びとあるべきだと。自分が学生の頃は、下宿の布団に長々と身を伸ばし優雅な午睡を極めていました。嗚呼、しかし、昼寝道のエリート、仮寝界のエトワールも夢の中では惨めな一兵卒でした！ 自分は憶えています。小糠雨が降る中を隊列を組んで汚泥をかき分けていたことを。泥底の何かを踏んでそれが爆ぜる。驚いて右脚に手を伸ばすが、膝から下はすでになく、裂けた骨が見える。血とともに意識も流れでていく。吠えるような悲鳴で目を覚ませば、そこは見慣れた四畳半。万年床に汗だくの男。天井から裸電球が初夏のそよ風に揺られている。

本書には、ひとつの戦争についての連作短編小説が収められている。そこでの戦争はどれも愚かで悲惨なものであるのだけれど、作者は声高にそう主張することはない。戦地における愛と憎悪を、華麗と醜悪を、秩序と混沌を、そして生者と死者をありのままに語る。それらは現実に起こった話ではないかもしれない。得られる教訓もない。しかし「本当」の戦争についての物語である。読者は闇を切り裂く曳光弾の輝きを、自分が殺した青年の死体が作る影の昏さを、極限状況で胸の中で何かがぎゅっと硬く絞りあげられるような感覚を、自らの経験のように味わうことができるはずだ。それらは心の奥にしまい込まれ、奇妙な断片として夢に顕れる。これらの物語は自分が籠る小さな日常の外にどのような世界があり、そこで生きるもしくは死ぬということがどういうものであるかを教えてくれる。

recommend 5

杉木 明子 先生
（法学部教授）

『アフリカにょろり旅』
青山 潤／講談社文庫

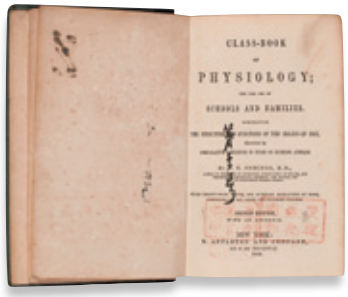
本書は、世界で初めてニホンウナギの産卵場所を特定した東京大学海洋研究所の「ウナギグループ」のメンバーが、幻のウナギ、ラビアータを求めてアフリカで調査をする物語ということになっている。もちろん、実際に筆者の青山さん、指導教授の塚本先生、後輩の俊くん、皆さん真剣にウナギを探し、素晴らしい研究業績を残している。研究のために、時に、乗り合いバスに乗るために現地の人々と競争したり、予想外の「ヤギ料理」に呆然としたり、なかなか捕れないウナギに思いをはせ、焦燥感にとらわれたりしている。

しかし、本書の醍醐味は筆者らが「ウナギ」を介してかかわる現地の人々との交流である。そこから現地の人々のつつましやかな生活、ユーモア、狡知、優しさが浮かびあがってくる。アフリカというと、ネガティブなイメージと結び付けられることが多い。だが本書には貧困や紛争だけではないアフリカの姿がある。本書が執筆されてから約10年以上が経過し、アフリカ諸国もそこに住む人々も変化しているが、今なお変わらぬものも多々ある。ウナギ好きの方も、そうでない方も、本書を読みながら、日本とアフリカの意外なつながりに思いをはせてみてはいかがでしょうか。

センセイ×本

recommend 6

都倉 武之 先生
（福澤研究センター准教授）



『Class-book of Physiology』
（コヲミング氏　人身窮理書）
請求記号：120Y@993@1（準貴重書）

塾生時代は、無暗に書架を眺めにホコリっぽい図書館旧館地下1階第3書庫に通った。当時は古い分類方法の和書が配架されていたと記憶するが、主題ではなく受け入れ順に本が並んでいるので、隣同士の本に全く脈絡がない。だからこそ意外な書籍と出会う。直感に任せて本を選ぶと、劣化した革がべっとりと手を茶色に染める本や、達筆すぎたり手擦れで読めないタイトル、箱や封筒に入れられ相当劣化していることを予感させる本などに自然と手が行った。開いたところに献辞や蔵書票、見慣れない蔵書印がある本は、その本が、どこからか三田にやって来たという当たり前のことを想起させてくれる。福澤諭吉創刊の『時事新報』が1936年に廃刊になって蔵書が三田に来たことも蔵書印で知ったし、福澤が1867年の2度目の渡米時に買ってきた英書中の1冊を蔵書印や書き込みを参考に特定して、準貴重書に変更して貰ったこともある（請求記号：120Y@993@1　これは確か、今はない白楽サテライトにあった）。稀に不届きな学生の落書きとは明らかに違う旧蔵者の意味ある書き込みが見られることもある。ある回想録へのある人の書き込みを想い出したのだが、改めて探したがどうも見つからない。慶應義塾図書館にある本は、近代日本を造った知の「かけら」の実物なのである。それらが並ぶ書架の間を逍遙する贅沢を充分満喫できるのは学生時代だけだったと痛感している。

月岡芳年『月百姿』

大判錦絵一枚摺百枚揃（1885～1892）

画面いっぱいに描かれた月をバックに華麗に戦う孫悟空と玉兎。
五条大橋から高く飛び上がり、画面の外の弁慶に扇を投げつける牛若丸。
漫画の一場面と見まごう鮮烈な構図のかっこよさ！
そしてお互いの過去と未来を幻視するかのような、吉原の遊女と禿（かむろ）（見習いの少女）に舞い散る桜の静寂。
――幕末・明治期に圧倒的な人気を誇った「最後の浮世絵師」月岡芳年（1839-1892）が描く『月百姿』の世界です。

武者絵の名手・歌川国芳門下で河鍋暁斎や落合芳幾らと学んだ芳年は、血みどろの残酷描写から「血まみれ芳年」などの異名で知られ、谷崎潤一郎や江戸川乱歩、三島由紀夫らに偏愛されました。しかし実際には無惨絵の他にも歴史や古典に材をとった幅広い作品を多数描き、再評価が進んでいます。度重なる苦難で神経衰弱に悩んだ時期を経た後、月岡芳年は「大蘇芳年」と名乗って復活を遂げました。『月百姿』は晩年の大作で、明治18年から約8年をかけて数点ずつ出版された大判錦絵のシリーズです。板元は日本橋室町にあった滑稽堂（秋山武右衛門）。当初はバラ売りだったものの、100点完結後に目録・序文つきの画帖も作られました。

題が示す通り『月百姿』のほぼ全ての絵に登場する月ですが、実は必ずしも主役の立場というわけではありません。主題となっているのは、謡曲や『平家物語』『今昔物語集』『太閤記』など広く文芸・歴史に取材された人物たち。その造形には『北斎漫画』や歴史人物列伝の『前賢故実』の影響や引用があるともいわれます。芳年は様々な主題をシリーズにまとめる存在として、月の光で画面を満たしますが、内容の詳細な説明はなく、描かれた物語の解釈は見る者に任されています。文芸や歴史上のエピソードに思いを馳せながら、芳年のかける謎を解いてみませんか。

（スペシャルコレクション担当　竹内美樹）

慶應義塾所蔵の『月百姿』は経済学者の高橋誠一郎先生の旧蔵品です。
図書館のウェブページでデジタル画像を公開中！（原本は閲覧できません。）

三田メディアセンター 美術品めぐり

三田メディアセンターのなかには、様々な美術品が存在しています。
普段何気なく歩いている館内を、美術品に注目して歩いてみてはいかがでしょうか。
ここでは図書館（新館）内にある美術品を中心に紹介します。

1 知識の花弁（飯田善國）

英語で “Petals of Knowledge” と
名付けられた動く彫刻。

**2 やがて、すべてが
ひとつの円の中に**（宇佐美圭司）

宇佐美氏が初めて本格的に手がけた壁画。
この図書館の建築家・槇文彦氏の依頼により
制作された。

1F

**4 ［植物図譜］図版671
Cordyline Fruticosa**
（バンクス）

3 都　市（保田春彦）

複写カウンター側から「居住」「開発」「文教」「通商」

B1F

16 わだつみのこえ（本郷 新）

17 ローマの公衆浴場
（ピラネージ）

ART OBJEC

5 At Sea Japan（パートレット）

510枚のエナメル・プレートの「水面」に、12枚の楕円形のカンヴァスに油彩で着色した「泳いでいるひと」を取り付けたもの。

6 遠藤プランニング設計ベンチ（通称：くじら）（藤江和子）

総重量2トンの18人掛けベンチ。全国に30作品ある「くじらシリーズ」の第一号。くじらのように大きい家具、ということからこの名が付けられた。

2F

7 モニュメント
（詳細不明）

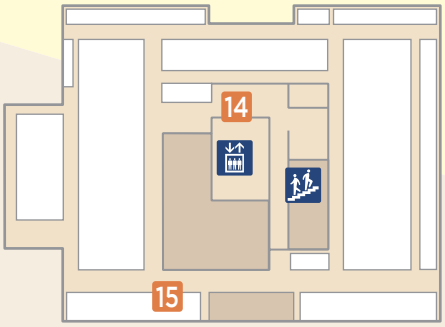
8 路上の英雄 No.3
（宇佐美圭司）

たじろぐ人、かがみこむ人、走りくる人、投石する人という4つの人型の運動形態と円、楕円、円錐形といった幾何学的形態とを組み合わせた作品。

9 春めく土手（川村親光）

10 風　景（西脇順三郎）

11 サンプロン峠にて
（中島千剛）



12 曼荼羅

ブータン王国寄贈
2011. 11. 17

3F

4F

13 花のアンサンブル（シメツク）

14 北近江（西村光人）

15 Parfum Blanc（井上公三）

図書館と猫の深い関係

友野 詩穂
（閲覧担当）

2018年9月から12月にわたって、私はイギリスとフランスの多くの図書館を訪問し、幸運にも大英図書館（British Library、以下BL）を訪問するチャンスも与えられました。ここではBLで開催されていた展示“Cats on the Page”の様子をお伝えできればと思います。

ロンドンで、今回最も長期間訪問させていただいたのは、BLです。あの「ハリー・ポッター」シリーズにも登場することで有名な、キングス・クロス駅のすぐそばに位置しています。

キングス・クロス駅外観。

BL外観。左側のニュートン像が利用者をお出迎え。

ちょうど私の訪問中だった、11月23日から“Cats on the Page”という展示が始まっていました。なんと誰でも無料で鑑賞することができます。日本だけで考えてみても、夏目漱石、谷崎潤一郎から大佛次郎、幸田文、池波正太郎等々、名だたる文豪たちに猫は愛されてきました。そんな世界中で愛され、様々な作品に登場する猫にスポットライトをあてた展示ということで、たくさんの来館者が見入っていました。

BLの“Cats on the Page”Webサイトより。
ビビッドなオレンジのデザインが印象的。

BL訪問時大変お世話になった、日本セクション担当の大塚靖代さんは、同展示にとある日本の作品を展示品として推薦されたそうなのですが、どの作品か想像できますか？……正解は、「ドラえもん」です!!　日本を代表する「猫」型ロボットですね。ちなみに展示されている本の表紙には、ドラえもんがのび太の口に「暗記パン」というひみつ道具を詰め込んでいるイラストが描かれています。その

イラストを見た展示担当チームが「一体何をしている場面なんだ？」と不思議がり、大塚さんは「暗記パン」の使い方の説明に少々苦心されたようです。他にも小泉八雲の「猫の絵を描いた少年」も紹介されていました。

実は、猫は図書館とも深いかかわりのある生き物で、デューイという図書館猫の物語が特に有名です。1988年の寒い冬の朝、アメリカ・アイオワ州にある図書館の図書返却ポストの中で、本の山の中に凍えた子猫が捨てられているのを図書館員が見つけました。その子猫は図書館で採用されている分類表の創始者の名前にちなんで、デューイと名付けられました。図書館のマスコットとして皆から愛され、「毎朝入り口に立ち、利用者を出迎える」など正規の職員として勤務していたそうです。（ご興味のある方はヴィッキー・マイロン著『図書館ねこデューイ　町を幸せにしたトラねこの物語』という本をぜひ読んでみてください。）

だいぶ脱線してしまいましたが、この展示を見て私はとても衝撃を受けました。なぜなら私にとってBLは「学術研究・ビジネス支援を中心とした、威厳ある図書館」というイメージだったからです。

愛猫家の来館が相次いでいるのはもちろんのこと、老若男女幅広い層の利用者の楽しんでいる様子が、印象的です。親子連れが会話を弾ませながら眺めているのも、度々目にしました。研究者以外の一般利用者にも親しまれている、BLのアットホームな雰囲気に驚きを覚えました。

同展示に限らず、BL内はあらゆる場所が連日、多くの利用者でにぎわっています。近年の図書館に求められるサービスや機能は図書館を取り巻く環境の変化とともに、ますます多様化していますが、そうした様々なニーズにも柔軟に対応し、BLは新たな図書館像へと変貌を遂げつつあるように感じました。今回BLを訪問した際、たくさんの職員の方にお話を伺いましたが、どなたもBLの使命・将来像について

「猫と本棚」の写真投稿をTwitterで呼びかけるなど、利用者とも積極的に交流。利用者同士のコミュニケーションも促進しています。

共通の認識を抱いていました。それは、「これまでのサービスを継承・発展させるだけではなく、様々な新しい試みも推進していく」というものです。BL設立50周年の2023年を迎えるにあたり、新ビジョン“Living Knowledge: The British Library 2015–2023”も策定されています。

➲ https://www.bl.uk/projects/living-knowledge-the-british-library-2015-2023

こうして世代・性別を越えたあらゆる利用者の活動の核となる場として、BLはしっかりと息づいているのだと思います。

図書館に「いま」求められる役割は何なのか。日々の業務の中で、常に忘れないようにしたい視点です。

新着図書デビューへの道

図書館の舞台ウラ
－実録FILE－

ほぼ毎日、図書館に仲間入りする本があります。新着棚デビューまで、どのような道のりを辿ってきたのか？
1冊の駆出し図書を例にレポートします！ 洋書は意外と時間がかかる!?

2018/SEP

SCOUT!!

1
選定・発注

刊行予定の本のリストから、
書評などを参考に
本を選びます。
（スカウト！）

▲洋書のカタログ

君に
決めた！

デビュー約4ヵ月前

発注の際は予算を
無駄にしないよう、
念入りに重複調査
をします。

✕ 重複、ダメ絶対！

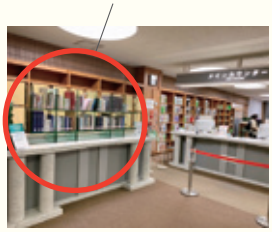
発注先は、特定出版社／主題の取引に
強い（?）ところなど、様々。

8
新着棚
デビュー！

DEBUT!!

スカウトから約4ヵ月、
ついに**新着図書としてデビュー！**
（すぐにデビューできる本もあります）

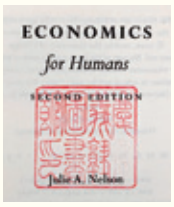
メインカウンター横【展示棚】



デビュー前日

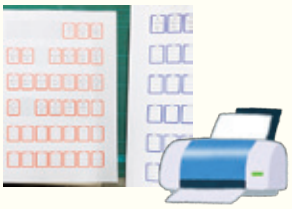
7
装　備

デビュー目前、閲覧担当装備班により
図書館蔵書としてふさわしくドレスアップ！



【慶應義塾図書館】
蔵書印

同・地印


請求記号ラベルの貼付
（データから自動プリントアウト）

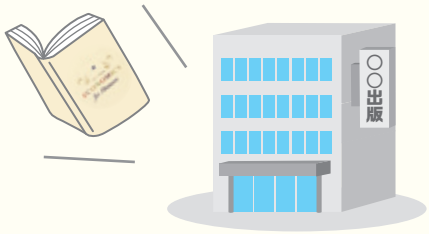
その他にも
- ☑ 返却期限日票の貼付け
- ☑ 無断持出し防止措置（その工程はTOP SECRET!!）

2018/DEC

デビュー約1ヵ月前

2 出版・刊行

予定どおり刊行！
何年も刊行遅延を繰り返す…
そんな本もあります。



和書は刊行前・後で間もなくスカウト、
わずか1〜2週間のスピードデビューも
少なくありません。

3 検　品

書店での検品を経て
メディアセンター（図書館）
へ出荷されます。

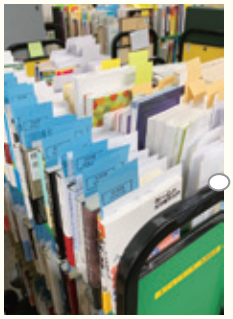
デビュー10日前

4 納　品

本がメディアセンターに到着！

三田・日吉・SFCキャンパス…ほぼすべての本が
メディアセンターの6階（本部※）に納品されます。

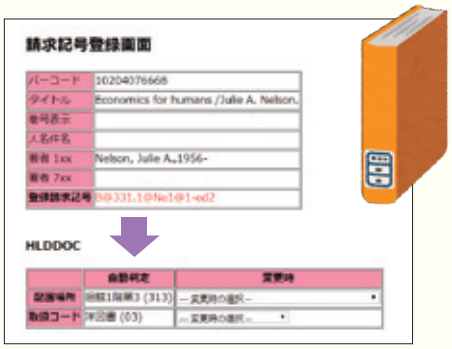
※本部：全キャンパスのデータをつくる秘密基地



届いた本は、
“発注/納入金額に大きな差はないか？”
“破損、乱丁などの不具合はないか？”
隅々までもれなくチェック（検品）

6 請求記号

本が三田メディアセンター1階の
選書担当のもとに到着！
本の住所［請求記号］を登録します。



請求記号が決まると、
“新館/旧館　何階？”
“貸出できる？”“何日間？”
が自動的に振分け
登録されます。

デビュー約1週間前

2019/JAN

本の目録データ（プロフィール）を作成します。

5 データ登録

プロフィール登録された本は
最終審査を通り、
各地区のメディアセンターへ！

晴れて KOSMOS に表示されます。
借りられるまであと一歩！

（選書担当）

お　知　ら　せ

図書館システムが変わります

2019年の秋、メディアセンターでは、早稲田大学との共同運用に向け、図書館システムの入れ替えを予定しています。これに伴い「KOSMOS」や「My Library」の画面も新しくなります。

ご注意

・現在ご利用いただいている**「貸出履歴」や「My Shelf」は、新しいシステムに引き継がれません。**事前に「リストの保存／E-mail送信」ボタンを利用し、バックアップしてください。

・移行直前に**予約・取寄せ（リクエスト）依頼中のデータが消えてしまいます。**「予約・取寄せ資料のお知らせ」メールが届かなかった方は、改めてリクエストをお願いします。なお、移行前に取置きが済んでいる資料には影響ありません。

その他にも図書館サービスの一部や開館スケジュールが変更になる可能性があります。
詳細は掲示やウェブサイト等で順次お知らせします。

卒論指導登録済の通信生による図書館利用登録回数の変更（2019年度）

通信教育課程生向け

卒業論文指導登録済の通信教育課程生が貸出や取寄せなどのサービスを受けるためには、利用登録の手続きが必要です。半年間（4月～9月または10月～3月）を1期としてこれまで最大4期（合計2年間）まで登録可能でしたが、2019年度より利用登録期間を変更することとなりました。

新）8期（合計4年間）※延長不可　　**旧**）4期（合計2年間）

※これまで図書館サービスを利用していた方の利用登録期間は、変更後の利用期間（8期）から既に経過した期間を引いた残りの期間となります。

2018年9月以前に4期（2年間）の利用登録期間が終了している方は、2019年4月以降、新たに4期（2年間）利用できます。（制度変更前である2019年3月31日までは利用登録はできません）

既に4期登録済の方の手続き開始時期は以下の通りです。

【再登録の方】 2019年4月より手続き可能
……2018年9月以前に4期（2年間）の利用登録期間が終了している方

【更 新 の 方】 2019年3月より手続き可能
……2018年10月以降に4期目の利用登録を行い、現在サービスを受けている方

資料移動予定

2019年5月末頃、図書館旧館の改修工事が終了する予定です。その後、より使いやすい図書館を目指して順次資料の移動・再配置を行います。そのため、一部の資料を利用できない期間が生じます。みなさまにはご不便をお掛けしますが、ご理解とご協力のほどよろしくお願いいたします。

編集後記

2019年春号、楽しんでいただけましたか？　頑張って作っている広報誌なのに、なぜか知名度が今一つだった「知識の花弁」。今までの号と変えるのだ！という決意のもと、まずは先生方の思い出の本や図書館の中の美術品を紹介してみました。夏に発行を予定している次号からは、現役の学部学生が編集に加わってくれます！「花弁」のさらなる変貌と発展に乞うご期待！

編集・発行　慶應義塾大学 三田メディアセンター
〒108-8345 東京都港区三田2-15-45
TEL 03-5427-1625　FAX 03-5484-7780
発行日　2019年4月1日
印　刷　有限会社 梅沢印刷所

http://www.mita.lib.keio.ac.jp
Twitter: @Keio_MitaLib
バックナンバーはこちらから ⇨